７、８世紀の灯明油に関する覚え書き

１　古代の植物油の種類

灯明皿および灯明油、灯芯について、これまで考古資料、文献史料からのアプローチが少なかった。本研究では７、８世紀の灯明を考える基礎的研究の第一段階として、文字資料に現れる植物油の種類を整理しておきたい。

具体的な植物油の名前は、多くは「油」とのみ記されており、どういった種類の油であったかは不明であるが、養老令の賦役令１調絹絁条や延喜式の主計上にみえる諸国の中男作物、主殿寮の諸条などにまとまって登場する。

列挙すると、胡麻油、荏油、麻子油、曼（蔓・槾）椒油、海石榴油、胡桃（呉桃子）油、閉美油の７種類である。胡麻油＝ゴマ、荏油＝エゴマ、麻子油＝アサ、海石榴油＝ツバキ、胡桃（呉桃子）油＝クルミの種子から搾った油であろうことは容易に想像がつく。灯用植物を研究した深津正氏は、閉美油が和名抄の記述などからイヌガヤの油であると論じ、また曼椒油についても、新撰字鏡、本草和名などに蔓椒の訓が「保曽木（岐）」とあることと、イヌザンショウが現在でも中部地方の方言で「ホソキ」や「ホソッキ」と呼ばれることから、曼椒＝ホソキ＝イヌザンショウと結論づけた（深津正『燈用植物』ものと人間の文化史50、法政大学出版局、1983）。

木簡にも油の記述が少なからずある。種類まで記すものは、荷札・付札が多い（表14）。胡麻油・麻子油・荏油・曼椒油は、賦役令に規定されている品目と一致する。「木油」（表14：３）、「富子木油」（表14：６）は植物油とみられるものの、何の油か不明である。

２　植物油の用途

植物油の用途はきわめて多様である。延喜式には塩や醤などと並んで記述される例が最も多く、これらは食用とみてよかろう。次いで多いのは燈盞や油坏などと併記されているもので、灯明用とみられる。工業用にも様々な局面で油が登場するが、皮製品、銀製品、漆製品に関連したものが特に多い。轆轤や車軸に注す油と明記している例もある（表13：４・６）。また、典薬寮や馬寮の記述から、油が薬にも用いられたことがわかる。

ほとんどの史料が「油」のみであることが多いものの、種類と用途がある程度推測できるものもある。食用に胡麻油が使われていることを除いて、甲の修理に胡麻油（表13：５）、鞍作りに曼椒油（表13：２）、靴や糸鞋作りに胡麻油と麻子油（表13：３）、馬の薬として曼椒油と胡麻油（表13：１）、漆器製作に荏油（表13：10）、染工も荏油が使われていたことがわかる。

灯明用と確認できる油は、ほとんどが胡麻油である。正倉院文書には仏堂や僧房・曹司の灯りに胡麻油を用いる例が散見され、延喜式によれば釈奠の灯明には胡麻油（表13：７）が用いられた。胡麻油の他、鎮魂祭（表13：８）と追儺（表13：９）には、曼椒油が使われた。

３　曼椒油とは

曼椒油とはどういった油だったのであろうか。延喜式では灯明油以外に、馬の薬や皮なめしに使われていた（表13：１・２）。イヌザンショウに含まれる精油成分には抗炎症作用があり、漢方薬として現代でも用いられているものの、日本ではもはや搾油はおこなわれていない。そこで、本研究では曼椒油の実態を探るための搾油実験をおこなった。大阪市立大学理学部附属植物園、いし本食品工業株式会社などの協力を得て、イヌザンショウの果実を集め、加熱して油を搾ったところ、オリーブ色の油を採ることができた。

また、イヌザンショウの油は、今でも中国や韓国で搾られており、調味料や薬として利用されている。なかでも韓国では伝統的な方法で搾油をおこなっており、金武重氏の協力を得て入手した油は、我々が搾油したものときわめて類似するものであった。

イヌザンショウは果皮に辛みと独特の香りが含まれるが、油分を含む黒子もしくは椒目と呼ばれる種子には、ほとんど香りと辛みはない。よって、種子から搾った油はまったく無味無臭の油であった。この油を用いて灯火実験をおこない、油煙の採取もおこなった。

今回の実験を通して、灯明皿についた油煙との比較可能な標準試料を得ることができたことと、120ｇの種子から20ｇ弱の油しか得ることができないことなどを知ることができた。今後、古代の灯明および灯明油に関する研究に活かしたい。

（**深澤芳樹**／客員研究員・**桑田訓也**・**神野　恵**・**中村亜希子**／日本学術振興会特別研究員・**庄田慎矢**）

表13　延喜式中の油の使い方を示す記述

1	凡馬薬毎季胡麻油一斗二升五合、椒油六升二合五勺、猪脂三升二合五勺、硫黄一升六合、（以下略）	左右馬式35馬薬条
2	椒油一升、〈塗馬皮料、請主殿寮、〉	左右馬式64走馬鞍料条
3	内蔵寮胡麻油二斗八升七合、麻子油二升五合、〈二升二合伊勢太神宮御鞍二具用途料、六升五合・麻子油二升五合造年料御靴并糸鞋等料、二斗盛山陵并所々荷前料、〉	主殿式12諸司年料油条
4	油一升一合、〈一升塗轆轤軸料、一合瑩大祓刀料、〉	木工式27年料条
5	兵庫寮胡麻油六合、〈五合修理甲一百領料、一合造大祓太刀并伊勢神宮祭鞍料、〉猪膏五合、〈同造大祓太刀并神宮鞍料、〉猪膏小廿斤、〈造鼓吹生等薬料、〉	主殿式12諸司年料油条
6	左右馬寮車油三斗八升三合、〈寮別一斗九升一合五勺、〉飼青御馬所料、油二斗六升四合、〈寮別一斗三升二合、〉季料胡麻油三斗二升、〈寮別一斗六升、〉椒油一斗六升、〈寮別八升、〉猪膏六升四合、〈寮別三升二合、〉	主殿式12諸司年料油条
7	名香二両、〈受蔵人所、〉胡麻油二升、油瓶一口、燈盞八口、〈加盤、下皆准此、〉燈炷布二寸、松明七十把、〈五十把燎五所料、廿把焼幣物料、〉	主殿式2釈奠料条
8	椒油二升四合、燈盞八口、油瓶一口、燈炷布二寸四分、	主殿式3鎮魂料条
9	十二月晦夜、供奉内裏并大極殿、豊楽殿、武徳殿儺料等雑物、椒油七斗六升六合、胡麻油四斗、油瓶廿六口、燈盞一千一百六十六口、〈二百五十三口加盤、〉燈炷調布一丈九尺三寸、燈台八十基、〈紫宸殿并御在所料、〉（以下略）	主殿式26十二月晦日条
10	膳櫃一合、〈長三尺三寸、深八寸五分、広二尺三寸、〉下案一脚、〈長五尺四寸、広二尺四寸、高一尺七寸、〉並塗赤漆料、漆一升二合、荏油四合、綿六両、絁・布各一尺二寸、炭一斗五升、功六人半、	内匠式6漆器条
11	練染用度絹六尺、糸三両、（中略）、胡麻油一斗、染藍功銭、〈数准時估価、〉（以下略）	内蔵式22諸陵幣料条

表14　油の記載がある主な木簡

	内　容	出　典	発掘次数	遺構
1	□麻子油三升□〔四ヵ〕合三勺 今□益	藤原宮1-41	藤原宮第18次	ＳＤ145
2	猪膏油胡麻	藤原宮3-1394	藤原宮第29次	ＳＤ170
3	伊勢国木油二斗七升	藤原宮3-1152	藤原宮第29次	ＳＤ170
4	味蜂間郡胡麻油一斗九升	木研11-32頁-1(6) (飛9)	藤原宮第58次	ＳＤ105
5	仏麻油一甕	飛鳥藤原京1-223	飛鳥藤原第84次	ＳＤ1130
6	富子木油	飛鳥藤原京1-225	飛鳥藤原第84次	ＳＤ1130
7	荏子油三斗	飛鳥藤原京1-224	飛鳥藤原第84次	ＳＤ1130
8	□年料荏油一斗三升□ 九年九月廿五日	城11-17上(159)	平城第93次	ＳＤ1300
9	中胡麻油二斗六升	城12-11下(65)	平城第104次	ＳＤ8600
10	上総国武昌郡高舎里荏油 四升八合　和銅六年十月	平城京2-2170	平城第193次E	ＳＤ4750
11	荏油	城25-22下(277)	平城第193次E	ＳＤ4750
12	丹波国味田郡曼椒油三斗	城25-21上(252)	平城第193次E	ＳＤ4750
13	丹□〔波ヵ〕国胡麻油二斗□〔二ヵ〕	城28-29上(1143)	平城第193次E	ＳＤ4750
14	尾張国荏油四斗四升 天平八年十月	城31-24上(315)	平城第200次	ＳＤ5100
15	二道郡胡麻油一斗七升五合 延暦八年十一月七日	長岡京2-1305	宮第141次	沼状堆積

※釈文の表記や出典の略号は、当研究所の「木簡データベース」にしたがっている。

「丹波国味田郡曼椒油三斗」

図79　曼椒油の記載がある木簡
（赤外線画像、表14-12）